

# 自己形成における宗教の意義

田 井 康 雄\*

## Über die Bedeutung von der Religion in der Selbstbildung

Yasuo Tai

(昭和56年9月18日受理)

### 1. はじめに

自己形成が教育においてしめる位置については、奈良大学紀要第9号において解明したが、その際、自己形成の目的との関係であらわれてくる宗教の問題に充分触れることができなかった。そこで、本論稿においては、自己形成における宗教の意義を教育学的観点から解明したいと思う。

この場合、宗教とは、宗派宗教という意味ではなく、人間の有限性という、いわば人間の本性に基づいてあらわれてくる宗教のことであり、自己形成を問題にする時、必然的に考察しなければならない要素であると考えられる。また、この問題はシュライエルマッハー (Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834) の思想の根底を貫くものである。いわゆる宗教観に基づく教育哲学の問題なのである。高坂正顕氏も「彼の思想の出発点をなすものは宗教であり、その帰着点を示すのも宗教である<sup>1)</sup>。」として、シュライエルマッハーの思想の根源は宗教思想であることを言明している。

さらに、その宗教が人間の本性に基づくものであるとは「宗教において、無限のものが個々の人格にまで形成され、形をとるということが存在する<sup>2)</sup>」ことであり、宗教が人間存在の有限性に対応する形であられることをシュライエルマッハーは最も重視していたのである。また、ディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) も、シュライエルマッハーの体系的な思想構造を次のように叙述している。「彼は哲学的世界観に対して、キリスト教的宗教性の価値を決めている。<sup>3)</sup>」と。

つまり、シュライエルマッハーにおいては、その思想の基本構造が哲学的でしかも宗教的なのであり、それはまさに人間存在の本質を解きあかそうとする態度が明らかにあらわれているからであると考えられる。

以上の理由で、シュライエルマッハーの思想に基づいて、自己形成における宗教の意義について考察を加えたいと思う。

### 2. 人間の本性としての宗教

シュライエルマッハーによると、「それ(宗教)は、単に人間の本性に存在するというだけでなく、人間のものの中でまったくすぐれたものとして存在する<sup>4)</sup>。」とされているように、宗教は人間に本来存在するものである。この本来存在するというポイントは、まさに、人間の有限性にある。つまり、人間という存在はあらゆる点において有限であり、そ

\* 教育学研究室

の自らの有限性を直観することによって、その有限性を越えた、いわゆる無限をとらえる可能性をもつのである。それゆえ、シュライエルマッハーは「宗教の本質は思惟でも行為でもなく直観と感情である。」<sup>9)</sup>と説明するのである。また、「宗教は宇宙を直観しようとし、宇宙そのものの表現 (Darstellungen) と行為 (Handlungen) との間にあって、敬虔な気持で (andächtig), 宇宙をうかがおう (belauschen) とする<sup>9)</sup>」のである。

シュライエルマッハーにとって宇宙 (Universum) とは、個としての人間のもつ有限性を越えたすべてのものであり、それゆえにこそ、「宗教は宇宙の存在と行為 (Dasein und Handeln des Universums) に関する直接の経験、及び、個々の直観と感情 (Anschauungen und Gefühle) において成立する<sup>9)</sup>」のである。つまり、人間は自らの有限性を自己直観する時、その有限性を克服したいとする願望が生じる。そこに、宗教があらわれるのであり、宗教は他から与えられるものではなく、「内からあらわれ出なければならない (hervorgehen)<sup>9)</sup>」のである。

シュライエルマッハーによると「聖所 (Heiligtum) をもち、維持しようとするのは宗教の能力のないことを示している<sup>9)</sup>」のであり、宗教の能力がないということは、宇宙を直観する能力がないことである。すなわち、自ら宇宙を直観できないからこそ、既成宗教をそのまま受け入れようとするのである。つまり、他から与えられる宗教を求めようとするのである。

これらは、それだけでは、真の宗教ではありえないのである。例えば、シュライエルマッハーが「神性 (Gottheit) は一個の宗教的直観の方法にすぎない<sup>10)</sup>。」と主張するのも、神という偶像をもつこと自体が宗教であるのではなく、そのような偶像をもつことによって、自ら敬虔な心になり、自らの有限性を自己直観する可能性が生じるにすぎないのであって、その意味においても、神は宗教の目的ではないのである。

シュライエルマッハーによると、「世界精神 (Weltgeist) を愛し、その作用 (Wirken) を注視すること、それがわれわれの宗教の最終目的 (Ziel) であり<sup>11)</sup>」、「世界を直観し、宗教をもつためには、人間はまず人間性 (Menschheit) を発見しなければならない。そして、人間は人間性を愛のうちに愛を通じてのみ発見する<sup>12)</sup>」のである。それゆえに、「いかなる人も、人間性を形づくる (ausmachen) ために、自己に欠けているあらゆるものをぎっしりもっていると信じる人を心から愛する<sup>13)</sup>」のである。つまり、他者において、人間性を見つける時、その人を受するのであり、その愛のうちに、人間性は宇宙への過程をたどるのである。それゆえに、また「人間性そのものが、本来、諸君にとって、宇宙なのである<sup>14)</sup>。」とシュライエルマッハーは説明するのである。というのは、「永遠なる人間性 (die ewige Menschheit) は、たゆまず勤勉に自らを創造し、有限の生命の移りかわる現われにおいて、自らを表現しようとする<sup>15)</sup>」がゆえに、永遠なる人間性は人間の有限性を部分的に克服するからである。「人間性はそれ自体、動的 (beweglich) で形づくりやすい (bildsam) ものであり<sup>16)</sup>」、「個々人の人間性を永遠なる人間性へと発展させることが宗教の根本的使命の一つであるとともに、自己形成の問題でもある。さらに、「人間性は、個別的なもの (Einzelnes) と一なるもの (Eines) との中間段階 (Mittelglied) であり、無限なるものへいたる途上の休憩所 (eine Ruheplatz) にすぎない<sup>17)</sup>」のであり、人間性は固定的な存在としてあるだけでなく、生成しつづけるものなのである<sup>18)</sup>。そして、「人間性の様々の契機を相互に結びつけ、その成り行き (Folge) から全体が導かれる精神を解きあかす (erraten) ことが宗教の最高の仕事である<sup>19)</sup>。」つまり、個を全体へ、有限を無限へと近づけることが宗教の仕事であり、その中間的なものとしての人間性が宗教の直

接的な対象となることができるのである。そのよりな意味において「道徳的世界 (die moralische Welt) は宗教にとって宇宙ではないのであって、道徳の世界にだけあてはまるものがあるとしても、それは宗教にとっての宇宙の直観ではないだろう<sup>299</sup>。」道徳はあくまで意志の問題であって、直観的問題はその範囲に含めないのである。「宇宙はたえまなく活動し、われわれに各瞬間にあらわれいる<sup>300</sup>」のであって、それをわれわれが直観できるかどうかは宗教の問題なのである。それゆえに、また、「宗教的感情 (die religiöse Gefühle) はその性質によって、人間の行動力を麻痺させ、人間を穏やかな献身的な享受へと招く<sup>301</sup>」のである。

すなわち、人間にとって、宗教と道徳はまったく異なるレベルの問題なのである。シュライエルマッハーの言葉でいうと、「あらゆる固有の行為 (Handeln) は道徳的であるべきで、また、道徳的でありうる。しかしながら、宗教的感情は聖なる音楽 (heilige Musik) のように、人間のあらゆる行ない (Tun) に伴うべきである。人間は万事を宗教とともに (mit Religion) なすべきであり、宗教から (aus Religion) なすべきではない<sup>302</sup>。」つまり、宗教は本質的に人間の本性に属するものであり、敬虔な心的態度をもつところにあらわれてくるものであるから、意図的に宗教を基準にして行為すべきではないのである。それに対して、道徳は意志の問題であり、感情から道徳は導かれるべきものではないのである。したがって、道徳を他人に教育することは可能であるとともに、必要なのである。しかしながら、「宗教のように、人間の心情 (Gemüt) において継続するもの (Kontinuum) はすべて、教授 (Lehren) や教え込み (Anbilden) の領域をはるかに越えている<sup>303</sup>」のであって、宗教の本質である「直観することを……教えることは不可能である<sup>304</sup>。」シュライエルマッハーは、「それゆえに、私は諸君をも他の人々をも宗教へと教育しようとは思わない<sup>305</sup>。」と説明するのである。

つまり、宗教へと導くような教育は他者によって行なわれることはできないのであり、また、真の宗教は他者から与えられたり、教えられたりするものでもなく、自らが自らの有限性を敬虔な心的態度で自己直観することによってはじめて成り立つ可能性をもつのである。というのは、「無限なるものを有限なるものの外部に、また、その対立 (das Entgegengesetzte) をその対立するものの外部に求めようとすることは、明らかに思い違い (Täuschung) である<sup>306</sup>」からである。

それでは、宗教はいかにして自らのものとしてあらわれてくるのであろうか。このことについて、考察を続けることにする。

個としての存在である人間が宇宙を直観する可能性はあらゆる人々にある。というのは、「この世界に対する人間の関係のうち、無限に向ういくつかの一定の移行の通路 (gewisse Übergänge) が切り開かれる展望がある。いかなる人もその前を通して導かれることによって、その人の感覚 (Sinn) が宇宙へ到る道を発見する<sup>307</sup>」からである。その意味において、現実に存在する宗派宗教もある程度の意義をもつことは否定できない。つまり「諸々の宗教において、諸君は宗教を発見するはずである<sup>308</sup>。」というシュライエルマッハーの言葉が示すように、諸々の宗派宗教は各個人が自らの宗教を自己直観する契機を与えてくれるのである。そして、この「直観の範囲 (Umfang) と真理性 (Wahrheit) とは、感覚 (Sinn) の鋭さと広さに依存する<sup>309</sup>」のである。シュライエルマッハーによると、感覚には三つの異なる方向がある。すなわち、「内部に向い、自我自身 (das Ich selbst) に到達しようとする」もの、「もう一つは、外部に向い、世界観の無規定なもの (das Unbestimte) に到達しようとする」もの、「第三のものは、その二つのものを結びつけ、

そうすることによって、感覚は常に両者の最も内的な結合の承認 (Annahme) においてのみ、安定 (Ruhe) を見出すのである<sup>31)</sup>。」そして、「このうち一つだけが人間の支配的な傾向 (Tendenz) になりうるのである。しかし、宗教に到る道はそのいずれからも通じている。そして、宗教はそれが見出される方法の多様性にしたがって、特有の形態 (eine eigentümliche Gestalt) をとる<sup>32)</sup>」のである。

すなわち、第一の方法は自己の有限性を自己直観することから、逆に無限性への直観を導くものである。第二の方法は自己の存在を離れて、理想像をどこかに求めようとするものである。つまり、直接的に無限なる宇宙へ近づこうとするのである。これら二つの方法は宗教的訓練によってはじめて可能になると考えられる。シュライエルマッハーの言葉によると、「絶対的帰依の感情」(schlechthiniges Abhängigkeitsgefühl, das Gefühl schlechthinniger Abhängigkeit) といわれるものによってのみ可能である。それに対して、第三の方法は自己の有限性を自己直観するという受容的要素と、それと同時にあらわれてくる自発的要素との相対的相互関係のうちに行なわれるものである。つまり人間のあらゆる行為においてみられる自発的要素と受容的要素とのうちに、感覚の鋭さや広さが養われるという自己形成の基本的構造に基づく方法である。

以上の三つの方法はいずれも人間の本性に基づくものであり、このような方法で感覚を発展させることによって、各個人がそれぞれの独自性をもった宗教というものがあらわれてくるのである。それが人間の本性としての宗教である。

このような宗教と自己形成との関係について考察してみることにする。

### 3. 自己形成と宗教の関係

シュライエルマッハーによると、宗教は与えられるものではなく、自ら生活するうちに現われてくるものである。それゆえに、「真の教会は行為 (Tat) の中に常に存在している<sup>33)</sup>。」といえるのである。そして、「宗教は……われわれが教会と呼んでいる共同社会の原理なのである<sup>34)</sup>。」さらに、「教会という共同社会 (Kirchliche Gemeinschaft) は家庭をたよりにしている<sup>35)</sup>」のである。つまり、人間社会の最も基本的単位であり、基本的構造をもつ家庭における生活原理が、宗教なのであり、教会とはそのような家庭の理想像として存在すべきであり、その意味において真の教会は人間の日常生活の中にあるべきものである。すなわち、前章で明らかにしたように、「人間は自己自身の中にこそ、宗教をもっている<sup>36)</sup>」のであり、それゆえに、その人間の成長・発達の原因である自己形成を問題にする時、必然的に宗教の問題を考慮に入れねばならないのである。

シュライエルマッハーによると、人間のあらゆる行為は自発性と受容性の相対的相互関係のもとに行なわれるのであり、その自発性と受容性の慣熟 (Fertigkeit) のもとに自己形成はすすめられるのである。この自己形成の過程において、様々の心的態度 (Gesinnung<sup>37)</sup>) があらわれてくるのであるが、そのうち、宗教的心的態度 (religiöse Gesinnung) は最も早期に生成するものであり、他の心的態度の基礎をなすものでもある。心的態度は様々の共同社会で生活するうちに形成されてくるものであり宗教的心的態度は、子どもにとって最初に加わる共同社会である家庭において主に養われるのである。その意味において、家庭は自己形成にとって、最も重要な場であるといえる。

家庭とは愛の共同社会であり、その中で成長していく子どもには自然の発達過程として「徐々に自我の確立 (die Setzung des Ich) も用意されていく<sup>38)</sup>」のであり、また、「子どもは母に対する愛と、母に対する他の家族の関係によって、しだいに広がっていくよう

な愛の関係へと入っていくのである。お互い同志の愛 (gemeinsame Liebe) がそのようにして、しだいに発達してくるのであり、これこそあらゆる心的態度と全体的な倫理的存在の基礎なのである<sup>39)</sup>。」

つまり、家庭においてそれ以降のあらゆる共同社会における基本になる心的態度を養うのは愛であり、また、同時に、その愛によって、子ども自身の自己形成の主体としての自我も生成してくるのである。

また、教会が家庭に似たものでなければならぬのは、「教会の教育に対する関係は、本質的に家庭の宗教的状态 (religiöser Zustand) に左右される<sup>40)</sup>」ものであり、「教会は心的態度だけを、より厳密に言えば、キリスト教的敬虔 (christliche Frömmigkeit) を求める<sup>41)</sup>」からである。

子どもの成長の初期は、自己形成にとっても、宗教にとっても、家庭が大きな意義をもつのである。とりわけ、家庭内にある愛情は教育愛の原形で、後に行なわれるようになる意識的自己形成の主体である自我の生成に大きな意義をもつ<sup>42)</sup>とともに、人間の本性として現われてくる宗教を自らもてるようになるための基礎である敬虔なる心的態度を養うことにも大きな影響力をもつのである。

以上の意味において、自己形成と宗教は同根をもつものであり、両者を切り離して問題にすることはできないのである。そして、その同根となるものが宗教的心的態度なのである。「心的態度は宗教的共同社会においては、あらゆる人々の中で同じ強さで外に向って、はたらきかけると同時に、生き生きしているのである<sup>43)</sup>。」それゆえ、自己形成も宗教も単なる個人の問題にとどまらず、他の人々との共同生活が大きな意味をもってくるのである。しかも、これらはこの時期においては、無意識のうちに行なわれるのであり、各個人をとりまく生活環境にむしろ重要性がおかれるのである。つまり、個としての人間とそれをとりまく生活環境との間の相互関係は、人間の自発性と受容性という本質的性質を通じて行なわれるのである<sup>44)</sup>。したがって、意志行為が充分に行なわれていない時期においては、むしろその子どもをとりまく環境が子どもの受容性を刺激することになり、そこから自発性が二次的に刺激されて発達してくるといえる。それゆえ、完全なる受容性のもとに成り立つ宗教も、自発性と受容性の相対的相互関係のもとに行なわれる自己形成も大きな相異を示さないのである。

次に意識的に自己形成が行なわれるようになってからの自己形成と宗教の関係について考察をすすめることにする。

意識的自己形成が行なわれるようになると、人間は神などの宗教的諸概念に何らかの関係をもつようになる。意図的な自己活動が可能になり、しかも、何らかの目的をもって意識的に自己形成を行なおうとする場合、その目的は、自己形成の基本的構造である自発性と受容性の相対的相互関係の中で求められると考えられる。したがって、自己形成の目的は窮極目的ではなく、自己形成の過程とともに変化・発展していくものである。

この変化・発展を遂げていく自己形成の目的に対して、宗教的なものが関係してくるのである。つまり、有限の存在としての人間が絶対的な無限性につながる目的をもとうとすること自体が宗教的態度である。

現実生活において、人間が何らかの障害や矛盾に出会う時、それから逃避しようとする場合と、それらを克服していこうとする場合がある。前者の場合、その逃避の方向として、ユートピア的なもの<sup>45)</sup>や宗教的なものに向いがちである。つまり、非現実的なものに向うのである。そして、この非現実的なものと現実生活との両方から影響を受けながら自己形

成が行なわれるのである。それに対して、後者の場合は、現実生活のあらゆる障害や矛盾に積極的にとりくみ克服するうちに自己形成が行なわれるのである。したがって、このような人間はあくまで現実的で、強い精神力をもつということが出来る。しかしながら、現実には後者のような人間は存在しないといえる。というのは、あらゆる困難を現実生活の中だけで克服できるような強い自我をもつ人間であっても、無意識的自己形成<sup>46)</sup>が行なわれる限り、非現実的なものの影響を受けるのである。

以上の理由で、自己形成は多少なりとも、宗教の影響を受けると考えられる。というのは、「宗教の最高の窮極的目的 (das höchste Ziel) は人間性のむこう側、人間性を越えた所において、宇宙を発見することであり<sup>47)</sup>」それが自己形成の有限性を無限に近づける可能性をもつからである。それに対して、宗教そのものは、最高の目的をこの世の中で正しく実現することができないとシュライエルマッハーは説明している。

つまり、宗教はそれだけでは現実の世の中で実際に現われてはこないのであり、自己形成の目的を導く無限性としての宇宙を示すものとしてのみ現われてくるのである。また、宗教なしで行なわれる自己形成は、その目的の有限性のゆえに不完全なものといえるのである。

したがって、両者はともにそなわって、完全に人間形成が行なわれる可能性がある。

宗教と自己形成はともに人間の有限性と、その有限性を無限性へ向って近づけていこうとする人間の本性の現われであって、両者を切り離して論じるところに、従来の宗派宗教や信仰宗教という宗教の本質をゆがめたようなとらえ方や、自己形成を単純な独学や自己教育と同義にとらえる考え方が生じるのである。

つまり、人間形成を基盤にして、宗教及び自己形成をとらえるところに宗教と自己形成の独自の意義が生じるのであり、そこに、教育学的意義も現われてくるのである。

#### 4. 宗教の教育的意義

前節でみたように、宗教と自己形成の関係は人間性をその根本におき、互いに欠くべからざる必須要素として人間形成において重要な位置をしめるものである。しかしながら、宗教は他人に教えるという領域を越えたものであることも明確なことである。そこで問題になってくるのは、この宗教と教育のもつ領域の基本的ギャップがいかにか克服されるかである。

シュライエルマッハーによると、「感覚は何らかの全体に関する 分かたれない印象を捉えようとする<sup>48)</sup>」ものであり、宗教は、まさに、この感覚によって、宇宙をとらえるところに成立するのであるから、論理的・分析的な思考を導こうとする教授とは全く別の次元の問題なのである。このような意味において、宗教教育(宗教へ導く教育)は不可能であるといえる。少くとも、人間の本性に基づく真の宗教という意味においては、他者に対する宗教教育は不可能である。シュライエルマッハーの言葉でいうならば、「理解 (Verstehen) で、彼らはその感覚をだましとられている<sup>49)</sup>」のであって、宗教教育は真の宗教への能力を奪いとってしまうのである。

しかしながら、先にも示したように、宗教は自己形成と密接な関係にあり、自己形成に対する教育の問題は教育学における中心問題であるがゆえに、宗教は教育学の重要な問題の一つなのである。この場合、特に被教育者の自己形成のあり方においては、自己形成の目的との関係で宗教は意義をもってくる<sup>50)</sup>。また、教育者にとっても、宗教は大きな意義をもつといえる。つまり、教育者にとって、教育活動において最も重要な要素の一つであ

る教育愛が宗教的影響を大きく受けるがゆえに、宗教を無視することはできないのである。

教育者の被教育者に対する教育愛の第一条件は「救済」であり、それは宗教愛の基本でもある。そして、この「救済」の念を成立させるためには、教育者も被教育者もともに敬虔なる心的態度をもっていなければならない。つまり、教育は教育者と被教育者の間の心のつながりによって、行なわれるべきものといわれるが、これこそ、まさに、両者が互いに敬虔なる心的態度をもってはじめて可能になると考えられる。そして、そこに、真の教育愛が生じるのである。したがって、教育愛は教育者が被教育者に対して、一方的に向けられるものではなく相互関係の間に生じるものであると考えられる。

また、教育者が教材研究を充分に行なえるのも真理を求めようとする価値愛によると考えられるが、これも単なる価値愛だけではなく、敬虔なる心的態度にささえられた教育愛の一側面としてあらわれたものと考えられる。

つまり、教師は敬虔なる心的態度をもつことによって、自己を高めようとする探究心も生じるのであり、これこそ、教師の専門職性を基礎づけるものともいえるのである。

そして、教師自身の自己形成を導くものとしても、宗教は重要なはたらきをする。年長世代に属する教師の立場は必然的に保守的になりがちであり、教育的はたらきかけにも保守的要素が大きな影響をもつようになってくる。その矛盾を克服するのも、敬虔なる心的態度に導かれる宗教心と自己形成である。宗教心と自己形成によって保守的要素は解消する可能性をもつからである。つまり、教師は常に自己をより高く進歩・発展させねばならず、そのためには、自らの限界を素直に自己直観し、その限界を無限に拡大していく<sup>51)</sup>ことが必要なのである。すなわち、教師が人間として十分に自己形成（意識的にも無意識的にも）を行なう時はじめて、被教育者である年少世代のものに、正しい教育的影響を与えるのであり、そこには、人間性に基づく真の意味での宗教性をもった自己形成が、年長世代の教師にも、年少世代の生徒にも行なわれていると考えられるのである。逆に、真の意味での宗教性をもった自己形成が行なわれていない世代（年少・年長両世代）においては、世代間の教育はむしろ世代間のギャップに妨げられることになる。宗教性をもつ自己形成というのは、自らの有限性を自己直観することから無限性へ向って進展していく自己形成であり、それゆえに、あらゆる人々が各人の有限性を共通に自覚し、ともに人間性という共通概念をもつことができるのである。したがって、世代間のつながりは必然的なものとしてその社会の基盤をなすと考えられる。この意味において、自己形成は決して個人の問題ではないのである。

つまり、宗教の教育的意義は自己形成を通じて実現されるものであり、自己形成は宗教的要素によって教育的意義をもつものになるのである。

最後に、諸々の宗派宗教の意義について、論及することにする。

## 5. 宗派宗教の意義

人間の本性に基づく宗教は自己形成にとって欠くべからざる要素であることはすでに明らかになった。しかしながら、「だれもが宗教を完全にもつことはできるわけではない。なぜなら、人間は有限であり、宗教は無限だからである<sup>52)</sup>。」有限の人間が無限性を直観する機会を与えるものとして、教会は大きな役割を演じている。シュライエルマッハーが「諸々の宗教において、諸君は宗教を発見するはずである<sup>53)</sup>。」というように、世俗的世界の中で神的な美そのものの特徴を求めようとするのが教会の役割なのである。つまり、

宗教は各人の中でまどろんでいる芽<sup>54)</sup> (schlummernder Keim) として存在しているのだから、その芽を発展させていくことが教会の使命なのである。それゆえ、先にも示したように、教会は家庭をその原形としなければならないのである。

ここでいう宗教の芽は元来家庭の中で発展していくものであるがゆえに、それぞれの家庭が多様性をもったものであると同様に、教会も多様性を必要とするのである。つまり各人が行なう自己形成が多様であるのと同じように、各人のもつ宗教も多様であり、その多様性に合わせた形での教会が必要なのである。このような意味において、宗派宗教は各個人の本性としての宗教にあわせた形で与えられる場合、各個人の真の宗教を発展させるとともに各個人の自己形成を導くことにもなるのである。その場合、あくまでも、教会は主なる立場ではなく、従なる立場をとるべきである。すなわち、個としての有限存在である人間が無限に向かって自己形成をとげていくために、そのような自己形成が充分に行なわれる生活環境が必要である。というのは、自己形成は自発性と受容性の相対的相互関係のうちに行なわれるものであるから、自我が一方的な主動権をもつわけではなく、かなり他からの影響を受けることによって行なわれるからである。そして、そのような生活環境は諸々の宗派宗教の教会によって用意されるのである。しかも、それは先にも示したように、各家庭によって本来は形づくられるものである。

以上のように、宗派宗教はその教義を教え込むというような積極的はたらきかけを除き、単に宗教的雰囲気をつくるという意味で、各人が自らの本性に基づく自己形成に伴う宗教性を発展させていくという、本来、各家庭がもつべき役割を補うべきである。すなわち、宗派宗教は各個人のもつ真の宗教を導き出すために消極的はたらきかけしか行なえないのであり、逆に、それを積極的なものにしていくことによって、各人のもつ宗教への能力を奪い、さらには、自己形成の充分な遂行をも妨げることになると考えられる。

つまり、「宗教という芸術作品 (Kunstwerk) は常にいたるところに展示されている<sup>55)</sup>」がゆえに敬虔なる心的態度のものはそれにひとりで気づくのである。日常生活の中で、おのずから生じてくるのが宗教であり、宗派宗教は、その契機を与えるにすぎないのである。

#### 参 考 文 献

1. 高坂正顕著：『高坂正顕著作集第6巻（教育哲学）』（理想社，昭和45年）p. 78.
2. Fritz Blättner: Geschichte der Pädagogik, 14 Auflage, S. 202.
3. Wilhelm Dilthey: Leben Schlegelmachers, Zweiter Band, S. 5.
4. Friedrich Schleiermacher: Über die Religion hrsg. von Felix Meiner, S. 98.
5. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 29.
6. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 29.
7. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 33.
8. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 43.
9. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 67.
10. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 69.
11. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 45.
12. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 50.
13. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 50.
14. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 50.
15. Friedrich Schleiermacher: a. a. O., S. 51.

16. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 58.
17. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 58.
18. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 55.  
 “Aber nicht nur in ihrem Sein müßt Ihr die Menschheit anschauen, sondern auch in ihrem Werden.”
19. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 56.
20. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 60.
21. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 32.
22. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 39.
23. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 38f.
24. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 78.
25. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 78.
26. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 79.
27. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 81.
28. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 85.
29. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 132.
30. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 90.
31. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 92.
32. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 92.
33. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 106.
34. C. Platz : Schleiermachers Pädagogische Schriften, 3 Auflage, 1902. S. 130.
35. C. Platz : a. a. O., S. 131.
36. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 109.
37. 宗教的心的態度 (religiöse Gesinnung) の他に、政治的心的態度 (politische Gesinnung), 科学的心的態度 (wissenschaftliche Gesinnung) などがあるとされている。
38. C. Platz : a. a. O., S. 200.
39. C. Platz : a. a. O., S. 200f.
40. Anton Strobel : Die Pädagogik Schleiermachers und Rousseaus (München 1928), S. 249.
41. Anton Strobel : a. a. O., S. 248.
42. 鈴木正幸編著『現代教育の原理と展開』(川島書店, 昭和55年), p. 30参照。
43. C. Platz : a. a. O., S. 162f.
44. 自発性と受容性の関係については『奈良大学紀要第9号』p.126, 『現代教育の原理と展開』p. 25を参照。
45. ユートピア的なものの意義については、大阪教育大学大学院修士論文『ロバート・オーエンの教育思想解釈についての一考察』におい詳論した。
46. 無意識的自己形成については、『現代教育の原理と展開』p. 27参照。
47. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 73.
48. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 83.
49. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 82.
50. 『奈良大学紀要第9号』p. 133, 『関西教育学会紀要第4号』p. 6 参照。
51. 『奈良大学紀要第9号』p. 134 参照。
52. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 133.
53. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 132.
54. 敬虔なる心的態度へと発展していくものと考えられる。
55. Friedrich Schleiermacher : a. a. O., S. 78.

### **Zusammenfassung**

Um die Bedeutung von der wahrer Religion in der Selbstbildung zu erklären, der Verfasser wurde das Wesen der Religion versuchen.

Die Religion als das Wesen der Menschheit bezieht sich auf die Selbstbildung. Das Verhältnis von jener zur dieser ist sehr dicht. Das ist, die Selbstbildung bildet nicht sich ohne die wahre Religion. Und die Menschenbildung entsteht aus diese zwei Faktoren.

Die Religion bildet sich aus die fromme Gesinnung und sie macht die Selbstbildung besser. Die fromme Gesinnung bildet sich aus die Selbstanschauung von die Endlichkeit von Selbst.

In der Erziehung, die fromme Gesinnung ist also etwas Fundamentales für den Lehrer und Schüler, denn sie bringt die Liebe zustande.

Die Liebe bringt die Erziehung zustande.